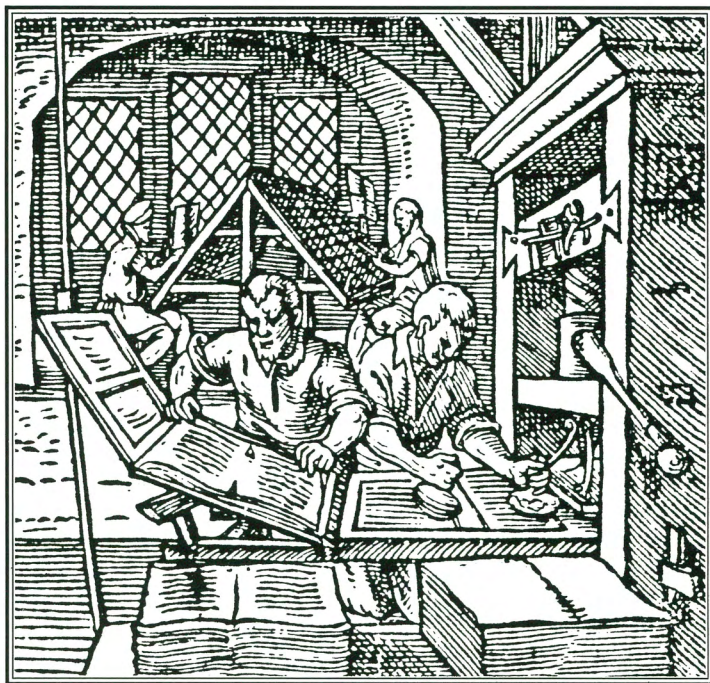


# 大学出版

'94 冬

No. 20



大学と社会を結ぶ  
知のネットワーク

*The Association of  
Japanese University Presses*

大学出版部協会



大学出版  
20号

Winter · 1994

読書の周辺 豊かなる極北の言語世界	一ノ瀬 恵	1
——マガダンにコリヤーク語を求めて——		
読書の周辺 実証—数量化と深層面接をめぐる—	安倍 北夫	5
国立公園・箱根での一九九三年度夏季研修会報告	関野 利之	9
日本生命財団出版助成「贈呈式」	渡辺 勲	11
——刊行助成部会の晴れ舞台——		
ミツバチの四季	田口迪太郎	13
大学出版部ニュース		15
新刊案内'93・10、'93・12		20
製作の現場から	表	3

## 豊かなる極北の言語世界

— マガダンにコリヤーク語を求めて —

一ノ瀬 恵

(北海道大学文学部助手)

この夏思い立って一ヶ月ほど、コリヤーク語の調査に出かけた。コリヤーク語はロシア連邦のカムチャツカ半島の付け根に広がる、コリヤーク民族管区を中心に分布する言語で、近隣のチュクチ語やイテリメン語などとともにチュクチ・カムチャツカ語族を形成している。さらに広くは、シベリア北東部に分布する、ウラル語族にもアルタイ諸語にも属さない諸言語を、系統関係とはわかりなくとりあえずひとまとめにした「古アジア諸語」のひとつに数えられている言語でもある。

これまでモンゴル語を専門としてきた私が、このシベリアの言語に関心をもつようになったのは、なによりも私自身がおかれている研究環境によるところが大きい。日頃、モンゴル語とは別に、北東アジアからベーリング海峡をへて北米北西海岸にいたる、いわゆる「環北太平洋」の諸言

語に触れる機会が多く、これらの言語を対象としたシンポジウム『北の言語・類型と歴史』（一九九〇年）の準備や、その同タイトルの論集（宮岡伯人編、一九九二年、三省堂）の編集にたずさわっているうちに、自然とコリヤーク語へいざなわれていったといつていいかもしれない。

環北太平洋沿岸地域は日本語やアイヌ語をはじめとする系統不明な孤立言語や、類型、系統を異にする多くの言語がひしめきあうという、典型的にも驚くべき多様性と複雑さの絡み合う言語世界である。ここでは、語が他の言語ならば文に相当するほどに多くの形態素を含みうる、エスキモー語をひとつの極とした複統合性、名詞語幹と動詞語幹を単一の動詞へと



生産的に合成する名詞抱合、名詞にはなく動詞に種々の文法関係を標示する主要部標示、自動詞の主語と他動詞の目的語を同じ格で標示するのに対し、他動詞の主語を別の格で標示する能格性等々、形態法ひとつ取り上げても私の狭量な言語観ではとうていすくいきれないほどに豊穡な言語現象があやなしている。ちなみにこれらの現象のいずれ

もモンゴル語では知られていない。

それにもかかわらず、おそらくはフィールド調査の困難さのゆえに、そしてこれらの言語をになう人々が辺境の少数民族族であるために、これまで日本でこの新旧両大陸にまたがる地域の言語が取り上げられることは、あまりに少なかった。その稀有な著作のひとつとして高橋盛孝氏の『北方諸言語概説』（一九四三年、三省堂）をあげることができ。この書で氏は、この地域の言語を「北方諸語」と名づけ、パレオ・アジア語系（本文でいう「古アジア諸語」にアイヌ語などをも含んだ概念）、ウラル・アルタイ語系、さらにはアメリカ語系に分類し、あたりかぎりの資料を駆使し、あたりかぎりの言語について論じておられる。

氏を北方諸語研究に駆り立てた理由のひとつは、おそらくはこの書の序にある次のことばからも読み取れるであろう。「比較言語学者の研究は、現在では、ほとんど印欧語のみに重点を置き、僅かに東洋の諸語に説き及ぼす程度に過ぎない。所謂言語哲学の研究の如きも、あまりに印欧語に偏して居り、もしパレオ・アジア語やアメリカ語を材料にして研究がなされたならば、その結論も余程迄異っていたらうと素人の私にも感ぜられる。」

これは、印欧語を専門とはしていないものの、日本語と類型的によく似たモンゴル語にかかわってきた私にも強く響くことばである。

とはいえ、環北太平洋沿岸地域の諸言語の研究は、ここ

数年間に確かなてきたとして新たな展開を見せている。

そのひとつの成果が、この地域の言語を正面にすえた先のシンポジウムと論集であるといえる。そしてまた、この書の編者であり私の勤める言語学講座の主任教授であられるエスキモー語学の宮岡伯人氏は、すでに旧大陸ではチュクチ語、新大陸ではアラスカのアリユート語、アッパー・タナナ語、カナダのハイダ語、ツィムシアン語、セイリッシュ語、ブラックフット語等のフィールド調査に、文字どおり専門に取組む若手研究者の育成を始められている。このような研究環境のただ中であって、これらの動きに対して無関心に徹せられるほうが不思議というものであろう。

もうひとつ、私がこの地域に心を動かさずにはいられない理由は、言語学的にこれほどまでに豊潤な世界でありながら、そのほとんどが「消滅の危機に瀕した」言語であるという事実である。もっとも話者数の多いエスキモー語でも新旧両大陸合わせて数万人。新大陸側の言語は、多くて数千人、少ないところでは百人ほどの話者が残るのみという状況にいたっている。シベリア側でも状況は大差ない。チュクチ・カムチャツカ語族を例にとれば、ロシア語の侵食に比較的よく耐えたといわれるチュクチ語ですら、話者数はおよそ一万一千人あまり、コリヤーク語は三千人、イテリメン語にいたってはわずか三百五十人たらずという暗い現実が、これらの言語の上のしかかっている。モンゴル語が話者数、五百万人とも六百万人ともいわれているの

に比べれば、これはあまりにも危うい数である。

この危うさは、とりわけ言語の機能について考えなおしてみたときに、改めて痛感されるであろう。言語のもっとも重要な機能のひとつが「伝達」であるというのは、今更繰り返す必要のないほどに自明の理なのかもしれない。しかし、言語をいわば道具視するこの考えは、円滑な伝達のために言語は少なければ少ないほど便利であるという、実用主義をもたらしかねない危険性をはらんでいる。一方、言語はそれ自体、個々の民族が多様な環境に対処、適応していくために、固有の分類体系にもとづいてそれを類別化し、範疇化するものであるという考えに立つのならば、話者数数億を誇る言語であろうと、わずか数人を残すだけとなってしまった言語であろうと、それぞれの民族の言語外現実に対する認識体系と知識を色濃く映し出すそのかけがえのなさにかわりはない。

こうして、私は北の言語への寄り道（もっともそれが寄り道に終わればの話だが）を思い立ったわけだが、数ある言語の中からコリヤーク語を選んだのは、アメリカ人類学の父ボアズの「ジェサップ北太平洋調査」（一九〇五年）と題した一文に刺激されたことである。ここには、ボアズが、旧大陸から新大陸への人類の移住・拡散のルートとしてのシベリア北東部とアメリカ北西部の民族的・文化的関係を解明するために、一八九七年から一九〇二年の六年間、考古学、民族学、形質人類学、言語学などからの学際

的な協力をえておこなった調査の概要と成果が書かれている。調査にはロシア側からボゴラス（チュクチ語、コリヤーク語、イテリメン語、エスキモー語）、ヨヘルソン（コリヤークの民族誌、ユカギール語など）、ラウフアー（アムール河流域の諸民族の文化）らが参加した。

ボアズはここで、北東アジアの諸言語（特にチュクチ・カムチャツカ語族）が形態法的には隣接するウラル・アルタイ系の諸言語とはなく、むしろ、複統合性、名詞抱合などの特徴においてアメリカの諸言語と関係づけられるべきものであることが明らかになったことを述べている。

ボアズはまた、この調査でとりわけコリヤークがエスキモーを隔てて、北米北西部のインディアンに分布する大鴉の神話に類似する神話を有していることが明らかになったとし、両者の早い時期における緊密な関係の可能性をも示唆しているのである。この刺激的な一文が、私のコリヤーク語への強力な案内役となったことは、いうまでもない。

とはいえ、フィールド調査は山登りのようなものである。遠くから眺めているうちは美しく見えたはずの山も、実際に登ってみると、険しい岩だらけの急勾配。頂上はなかなか見えてこない。私の今回のコリヤーク語調査もそんな山登りに似ていた。なにかことを起こすには、やはり若くて背負い荷物の軽いときがいいと、これほど痛感した旅もなかった。なにしろ、十ヶ月の乳飲み子を連れた身には、一年前にチュクチ語のフィールド調査を始め、多少は

土地の事情にも通じ、日頃から育児にも協力的な連れ合いという同伴者をえても、カムチャツカ半島の対岸、いわば北東シベリアへの入り口ともいえる、マガダン州の州都マガダン市にたどり着くのが精一杯。いや、そもそも乳飲み子を抱えた身でありながら、コリヤーク語調査を企てたこと自体、無謀といえれば無謀であった。

コリヤークが集中的に居住するコリヤーク民族管区はマガダン州ではなく、カムチャツカ州の管轄である。そのため、マガダン市でコリヤークを見つけ出すのは文字どおり、至難のわざともいえる。ここで出会うアジア系の民族の多くは、チュクチである。なぜなら、チュクチ民族管区はこのマガダン州の管轄になるからである。着くとすぐに調査を始めた連れ合いを後目に、私は市役所で少数民族の登録リストからピックアップしてもらったわずか六人のコリヤークの名前と住所をたよりに、まるまる一週間、コリヤーク語をもとめて歩き回った。七月とはいえ、オホーツクの海から冷たい空気ががのぼってくる霧の町マガダンは、北海道の晩秋を思わせる寒さである。背中に背負った娘の手足が、気がつくとすっかりかじかんでしまっていたなどということも一度や二度ではなかった。

リューダさんを捜し当てたのは、今回の調査をほとんど諦めかけていたときだった。訪ねること三度目にして彼女が優しい笑顔で迎えてくれたときの安堵感といったら！他の数少ないコリヤークたちは、冬に備え、鮭鱒漁やきの

こ狩り、ベリー摘みに追われていて調査どころではないか、コリヤーク語がよく話せる人がいるというので訪ねると、重い肺結核で入院中といったありさまだった。

リューダさんはマガダン州セヴェラ・エヴェンスキ区タポロフカ出身の三八歳の女性で、今はマガダン市内の薬局に勤めている。ウクライナ人の父親と、コリヤーク人の母をもち、コリヤークを名乗っているが、コリヤーク語は幼いときに話していただけで、今は聞けばわかるが話すことはあまりない。そのため、調査はあらかじめこちらで用意した基礎語彙票にしたがって進めるわけにはいかず、多くの場合、彼女がコリヤーク語の語句を自発的に思い出すのを辛抱強く待ちながら、記述していくという具合に進められた。ときに芽づる式に単語や文までも次々に蘇ることがあるかとおもうと、またときには、一語も思い浮かばずにその日の調査を終えなければならぬこともあった。しかし、このような作業をとおして、彼女自身が思いもかけず、コリヤーク語の単語を記憶の底から蘇らせることに、コリヤークとしての血を再確認しようとはじめた姿に私は打たれ、民族としてのアイデンティティに言語がいかに大きな意味をもつものかを改めて思い知らされた。

基礎語彙すら十分に集められずに終ってしまった今回の調査だった。まだ山の一合目にも到っていない。しかしこの北の豊かな言語世界に重たい荷物を背負いながらも何度も戻っていくであろう自分を、いま私は確かに感じている。

## 実証

— 数量化と深層面接をめぐって —

## 安倍 北夫

(聖学院大学政治経済学部教授)

深層面接という手法がマーケット・リサーチの分野に導入されたことがある。勿論現在でもその方法は用いられている。しかし、戦後この方法がアメリカの購買調査の文献に見かけられるようになったときは、正直言ってどうして深層分析の手法を購買調査に用いるのか、とんと合点が行かなかったものであった。

何人かの若手の研究者たちと、そうした文献をよみあざり、又、広告会社やマーケット・リサーチ関係の友人たちとも語らって、モティベーション・リサーチ研究会などというものをつくって勉強をかさねたものであった。

「何が好かれるのか」「どんな広告に目をとめるのか」「どんな広告コピーを憶えているのか」「何を買ったのか」「買ったものに満足しているのか」、およそ購買についての行動を微に入り細をうがって質問をならべたてれば、何パーセントの人がどんな色を好み、どんなコピーをおぼえ

ていたか、そして何を何パーセントの人が買ったかはわかる。ものをいうのは何よりも、その冷徹な数学なのだ。若い女の子が、たとえパーセントでもクリム色よりもピンクの色を好むとなれば、そのパーセントは実数に直してみれば、何百万人という数になるであろうし、その商品がたとえ数千円の品物であろうと、何十億円という損得につながりかねないのである。すべては実証的な数字なのだ——とそうした数字信仰に対してモティベーション・リサーチは疑問をなげかけたのであった。

いわく「いったい消費者は真正直にこたえるものであろうか」。たとえば、いかがわしいマンガ誌を好んで購買しているものに、ずらりならべられた週刊誌のリストやマンガ誌のリストのなかから愛読誌を選べといった場合を考えしてみれば良い。そしてさらに、何故そうしたのですかと聞いてみた場合「いったい消費者は本当に自分の気もちを知っているものだろうか」うっかりすると私どもは、「自分のことは自分が一番知っている」というところからすべてのことを発想し、そこから出発する、そのことが時に上スベリとした設問になり、その設問から出てきた「みかけ冷徹で細緻であり、縦横に分析しつくされた」実証的な数字論を信仰することになる。むしろ「自分が一番自分のことを知らないかも知れない」のであり、「自分は自分のことを懸命に表現しようとして、表現し得ないものだ」というところから出発しようではないかというのがモティベーション・リサーチの考え方であった。そして、「自分を知

らない自分」「自分を表現できない自分」「自分をいつわりかねない自分」を知る為の方法として、深層心理学の手法を導入してきたのであった。それが、耳慣れない「深層面接」というマーケット・リサーチの方法であった。勿論、深層分析の手法はそれだけにとどまらず、投影法——プロジェクティブ・テクニクの方がより有効で、より客観的手法として導入され、むしろその方が現在定着するにいたっている。

さて、いきなりモティベーション・リサーチや、「深層面接」や「投影法」をもち出したのは、何も消費者心理や、購買動機についての話をしようとしてのことではない。

実証とは即数字であらわすことだという短絡的な考え方が無意識にわれわれの間に支配的になっているのではあるまいか。たとえば入学試験での偏差値もその一つである。学力を偏差値に凝縮してしまっって評価すること自体もそうだし、そしてその学力で一人の人間を定位してしまっって、場合によれば、わずか一点か二点の差で乃落を決めてしまう。あらかじめ「公告」し、その「公告」を承知納得の上で乃落が決まるんだから仕方ないとはいえ、奇妙キテレツな話ではある。いわく「客観性」いわく「公平性」いわく「信頼性」と問われれば偏差値という数字であらわされたものは、言い争う余地なしの冷厳なものさしなのかも知れない。けれど、それがどんな「妥当性」をもっていかるとなると、ハタと考えさせられるのである。そこに所

在する問題を大学が知らないわけではない。そこでそれを補う為に様々な工夫や努力をすることになる。「深層面接」からは及びもしないが色々な構造的な組立てをした設問をし、それに応じた評価を行う面接をしたり、学力以外の人間的価値を「妥当性」の中に組みこむ為の工夫、たとえば一芸一能をみるとか、高校時代の学力以外の活動を評価対象にとりあげるとか、そして最近ではボランティア活動などをとりあげようという大学も出てきたという。大学人としてはまことにうれいことだが、しかし、どうやって「選抜」における「公平性」や「客観性」「信頼性」を確保するのかに苦心させられるのである。

つい最近、筆者の主たる研究領域の一つである災害心理学からんで、何人かの研究者たちとグループで、「高齢社会における災害対応」の調査を行った。純粋な学問の法論的研究というよりは、むしろ防災対策のウィークポイントについて、出来るだけ早く組織的把握を行い、対策についての基本資料や提言を行いたいという願いからであった。

平常の生活の中においてさえ、高齢者は生活に多くのハンディをかかえている。そして病気や災害ともなれば、こうしたハンディはときには生死をわけるものになりかねない。たとえば行政側の対応として最近「ペンダント・システム」という緊急通報装置が考案され、寝たきりの病人や独居の高年齢者などに設定できるようになっている。ペ



ンダントを押しさえすれば、二十四時間中、どんな時間であらうと、消防署に警報が通ずる。受けとった消防士が声高電話で、「どうしました、大丈夫ですか、火事ですか、病気ですか」とたずねてくれるシステムである。しかし考えてみると、ホントウに緊急のとき、いったいペンダントであらうと押せるものであらうか。心臓麻痺をおこしたらどうしよう、寝タバコで気付いたら、煙が濛々としていたらどうであらう。そこでこの緊急通報システムをもう一歩すすめたシステムを考案して実施した地域がある。それはトイレのドアに開閉スイッチをつけ、集積回路を組み込んだものである。ある一日、二十四時間中、一回もスイッチが開閉しないようなケースがあれば緊急受信盤上に、その家の認識番号が表示され緊急信号が鳴るのである。しかし、ここまでやってみたところで、やっぱりそれは「緊急事態対応」とはならない。それはせめて、ときどき新聞紙面にのせられる悲惨な孤独死をすこし早目にてキャッチできたということにしなければならないのかも知れないのである。

話しが傍道に外れたが、最近の奥尻島の大波波にしても、いわゆる災害弱者といわれる人をどう守るかが、これからの災害対策の決めてであることを痛感させられた大災害であった。

さてグループの研究者たちが、それぞれ課題をもちよ、又調査対象になった六十五歳以上の人たちの様々な特性——住居地域の特性をふくめて、住居そのもの、設備備品、地域での居住年数、近隣でのつき合い、健康の工合、

災害対策、勿論、家族との関係、家人の所在のあり方などの実態をアンケートによってあきらかにしてみた。

この種の調査をするのは勿論、地域の特性についての統計資料を参考にする。そして何がしかの仮説を立て、設問を組立てる。従って調査があがってきて、コンピュータにのせ、指令を出してそれこそ縦横に分析をかけ、うちこまれた数表をみていくと、大方は「そうだろうね」「やっぱりそうか」という結果が大部分である。しかしそれはそれで貴重なのである。つまり、「独居老人」はそうでない「家族と一緒に住む老人」に比べて災害に対して「不安が大きい」というのは当然であって、いままら調査をして「不安の傾向が何パーセント上まわっている」なんて言ってくれなくたってわかっているよ、というものかも知れない。しかしそれがはつきり、「実証的な動かしがたい数字で、しかもどの程度ということなど」あきらかにされることの意味は大きいのである。

そしてもう一つが、新しい発見である。あるいは常識ではあまり問題にもされていなかったことが、数表の上で不在を主張しはじめることである。

たとえば、今回の調査で、近隣——向う三軒両どなりや、町会とのつき合いにあわせて、地域のさまざまな集団にどの程度加入しているかをたずねてみた。「老人クラブ」「趣味・学習・スポーツのクラブ」「社会福祉のボランティア・サークル」「生活協同組合」「商業や同業者団体」

「遺族会・戦友会」そして「宗教団体」がそれであった。  
(重複チェックをゆるす方法)

結果は「老人クラブ」「趣味・学習・スポーツ」について、第三位が「宗教団体」なのであった。そしてその割合は、「老人クラブ」二・三・三%「趣味・スポーツ」一九・一%に対して一二・八%であった。最も高い率を示したのは女性七十代前半の一九・二%、最も低いのは男性七五歳以上の六・六%というのが分析の数字であった。

しかも面白いことに、別の設問で、親しい友人と、どんなつき合い方をしているかを聞いてみると「宗教団体」に加入している人たちはそうでない人たちに比べて、およそ様々なつき合い方——物のかしかり、心配ごとの相談、買物の手つだい、趣味、お茶のみ話し等のすべてにわたって、深いつきあいをしており、そして、それらのつき合いにまさって、「宗教でのお集り」が一番多くしているのがあった。

それから又、「大災害があつて、どこかに避難して生活をしなければならぬとき、だれが頼りになりますか」と聞いた別の設問に対する答えを、宗教団体に加入している人たちと、そうでない人たちとに仕分けてみると、一般の人たちの場合は「町内会」「消防団」というものが殆ど全部なのに、宗教団体加入の人たちの場合、第一位は「宗教団体」なのであった。

これほどまでの数字で高年齢者の生活の中に実質的重味をもつて宗教が入っていると予想をしていなかったとす

れば、あるいは設問者の側における「不覚」であったのかも知れない。何よりもプライバシーの問題があるにせよ、その「宗教団体」の何なのか設問ではチェックしきれなかったのは、残念なことであった。しかし、たとえ設問の中でそれをチェックできたとして、その宗教団体がキリスト教なのか、仏教なのか、新宗教なのかでは対象者があまりに細分化してしまい、統計的分析に堪えるまでにはいたらなかったであろう。

話題がマーケット・リサーチからはじまって、高年齢者の災害対応にいたり、そして最近の筆者の研究の一端までいたった。

主題は、実証と数量化の限界、それを補うものとしての深層面接やプロジェクト法についてであった。しかし実は、このとりあげ方そのものに問題があるのかも知れない。むしろ、「人間や社会の実態、それを動かしているものを知るために、われわれはその一人一人を知らなければならぬ。そしてその為には社会の動きそのものに身をゆだね、ともに動き、働らき、なやみ、もがく。そしてその限りある努力を補うものとして、数量化しアンケートをこころみる」ということではなからうか。

#### 参考文献

「高年齢社会における地域活動——宗教団体への加入をめぐる」安倍北夫 一九九三年 聖学院大学論叢第六巻

## 国立公園・箱根での

### 一九九三年度夏季研修会報告

関野利之

(玉川大学出版部)

一九九三年度夏季研修会は、八月二十六日(木)～二十八日(土)の三日間、国立公園箱根の一角、大平台の私学共済箱根宿泊所・対岳荘で行われた。北は北海道大学図書刊行会から南の九州大学出版会まで日本側出席者五八名、今年隔年ごとに開催されている日本・韓国大学出版部合同セミナーが日本側担当ということもあって、韓国大学出版部協会のメンバー一六名が参加し、総勢七四名の盛会になった。

今年の研修会担当のホスト校は産能大学出版部である。以下、順を追って記録してみよう。

#### 日本・韓国大学出版部協会合同セミナー

このセミナーも干支に譬えればワンサイクルの最終ラウンド十二回目を迎える。日本側を代表して幹事長の山下正氏が歓迎の挨拶をする。韓国側の団長は、檀国(ダング)大学校の金相培出版部長が応える。贈り物の交換をする。

いよいよ、セミナーが始まる。会場ホールは、正面に視

界いっぱいガラス越しに折からの台風を予見して展開する箱根の森林峡谷の荒れ模様が見える。

日本側は、「大学出版部の現状と展望」と題して、東京電機大学出版部の朝武清美氏が発表する。

一九七二年のアジア太平洋地域大学出版部会議、一九八二年には日米大学出版局刊行物展、「日米学術出版の状況と課題」公開コンファレンス、一九八六年には北京国際図書展、一九八八年は協会創立二十五周年で全国的な規模で、大学出版部運動を展開し、記念講演会・ブックフェア・記念と感謝の会・『25年の歩み』『総合図書目録』の発行等が行われた。一九八九年は世界の大学図書展、そして今年が三十周年になることを実例をまじえてたどる。

「日本の大学出版部の現状と大学出版部協会」では、組織形態で、財団法人・学校法人・株式会社に分けられること、現在加盟の大学出版部の専任職員二六五名、新刊点数六五二点、定価合計三九五万円など具体的な数値を挙げて説明。協会活動の月例の幹事会・編集部会・営業部会・刊行助成部会の現状を報告する。

韓国側は、「韓国・日本大学出版部協会の協力と展望」と題して、檀国大学校の金相培先生が発表する。

漢字の使用圏国家としての共通性を取り上げながら、要点を六項目に絞った。自国に極限しない著者の発掘・共同製作販売の方策・共同展示会・情報交換の窓口・国際販売機構としてのマーケティング・実務者の短期研修のプログラムを提示した。そして、親陸から実務への時期の到来、日本の業界に学ぶ、委員会を設置して協力場の発見に努

めたい。そして、檀国大学の例として、発行点数二〇〇うち品切れ二〇点、教科書六〇％・研究所二五％・一般教養書一五％、ただしソウル大学・ヨンセイ大学などは市販が六〇％を占める、と締めくくった。

#### 分科会（編集部会）

PR誌『UP』について、東京大学出版会の坂井真弥氏が講師である。PR誌の「効用と問題点」というテーマで、概要・年間の経費と労力・読者の数・年間の広告収入・編集方針などを具体的に聞き取る。

#### 分科会（営業部会）

大学出版部協会設立30周年を記念しての『総合図書目録』『30年の歩み』が完成し、現在進行中のブックフェア教材も充足した。93〜94年にかけてのプランニングのより精細な検討がおこなわれた。

#### 分科会（刊行助成部会）

『文部省刊行助成』を研究する」というテーマで、東京大学出版会の渡辺勲氏。はじめに東大出版会における「文部省刊行助成」についての考え方が述べられ、適正なる補助金申請額はどうか、という命題に挑戦、さまざまな数値を挙げて、検証し、結論にもってくる。

私たち学術出版の編集者は、「国の予算を良いことに役立てて使っている」。この予算規模はもっと拡大されるべきだし、もっと有効に使えるよう努力すべきであると。

研究発表「二十一世紀に向かって大学出版部の新しい可能性」山下正氏（大学出版部協会幹事長）

「二十一世紀の大学改革・新しい大学像の模索」にあたって、私たちAJUPの日常活動である編集・営業・刊行助成部会の在り方も再考すべき時点にきているのではないだろうか？大学の多様化に本格的に取り組むべきでもあろう。カリキュラム編成の自由化によって教科書づくりのノウハウが求められ、画一的、平等主義を排する個性的多様性の、時代でもある。国立大学に対する私立大学の位置づけ、社会人の大学への積極的導入、市民のための大学、大学外の知識人の交流の場、カルチャースセンター、生涯教育の在り方など、村上・三浦氏らの例を引きながら力説。

もちろん、優れた学術書の出版が本命ではあるが、それぞれの大学がもくろんでいる大学像に相応しい出版を模索すべきであろう。編集技術の高度化がさらに要求され、新しい教養書とはどのようなものなのか、という論議が起きて当然であろう。大学の広告塔の役割を示す「大学出版部の存在証明」が期待されるのであろう。

「出版流通の変化と学術書の販売」では、合理化・近代化の叫ばれる今日、取次・書店そして委託・返品の問題、とりわけ学術書の販売には独自の方向を見いだし、トーマン・日販とは異なる専門書の取次ぎを育ててゆく。出版界の統一VANが望ましいが問題が山積しているようだ、と締めくくった。

箱根山は、台風の余波を受け、雨風にけぶっていた。

# 日本生命財団出版助成「贈呈式」

—— 刊行助成部会の晴れ舞台 ——

渡 辺 勲

(東京大学出版会)

夏がゆき秋の気配が漂い始めるころ、日本生命財団の出版助成を受けている出版部の、とりわけ刊行助成部会の担当者は、ちよっとした、場合によっては胸を締め付けられるような、緊張を強いられる。というのはこの時期は例年、出版助成にかかわる三つの出来事が次々と襲ってくるからである。時間を追って説明すると、以下のようになる。



高橋壽常理事長の御挨拶

①六月末に締切られた「申請候補書目登録」(私たちは仮申請とかノミネイトとか言っている)の結果が「内示」される。書目登録から「内示」への過程は、出版助成の第一関門である。刊行助成部会では、各出版部から提出された登録書類(「著・編者のプロフィール」「刊行の目的および意義」「目次および内容の概要」)にもと

## 出版助成金贈呈書

出版部 東京大学出版会殿

助成金額 金 5,253千円

著者 渡 辺 勲 殿

著書 渡 辺 勲 (しげき) の研究  
—— 家駒(くげま)の成立

頭書の通り出版助成金を贈呈いたします  
本出版を契機により一層文化・学術の  
振興に寄与せられて真に豊かな社会の  
建設に貢献されることを期待いたします

平成 5 年 10 月 1 日

財団法人 日本生命財団

会長 向 坊 隆

理事長 高橋 壽常

づき、日生助成担当主幹の石井和夫協会顧問を中心にしてミニ企画会議のような検討会をもち、登録書目を確定する。だが、「登録」即「助成決定」というわけではない。まず「内示」を得なくてはならない。九月初めの「内示」によって助成申請の権利が与えられるというわけである。

②小文表題の「贈呈式」が行なわれる。日生助成制度の発足は一九七九年のことであるが、十月一日に行なわれた今年(九三年)の「贈呈式」は数えて第一四回目となった。式には、助成を受ける図書の著者・編者、出版部の代表、協会関係者ら多数が招かれ、財団理事長・高橋壽常氏より「出版助成金贈呈書」を頂戴するのである。それは私たちにとって大変に晴れがましい場面ではあるのだが、同時に「贈呈書」に記されている「本」をなんとしても今年度中に刊行しなければならぬことを、著者の先生方と共に誓



大学出版部協会に見入る参列者

いあう場でもある。式の後に催される豪華な懇親会会場で交わされる私たちの会話が「お宅のは予定通りにいっている？」ということに集中してしまふ、という次第である。

③次が、「内示」を得た書目の出版助成申請書の作成である（通称「本申請」）。必要となるのは先の登録書に加えて、原価「見積書」と「推薦書」二通であるが、十月

末書類提出と時間が切迫してからの推薦書（しかもお二人からの）作成もさることながら、必ずしも原稿が完璧になっていない段階での「見込み見積」は結構辛い作業となる。この書類によって、定価は当然だが、助成申請額まで決まってくるわけだから、慎重の上にも慎重を期さねばならない。これにより、財団の審査をへて、翌年三月、財団理事会で採否の決定をみることになる。

ざっと①②③のような過程を踏んで、日本生命財団出版助成図書は誕生するのだが、今年の贈呈式会場で披露された第一三回助成図書の一群は実に壮観であった。手前味噌ながら小会の『図集・日本都市史』もすごい本だが、北大の『米欧回覧実記』の学際的研究の素晴らしさ、早大の

『アトラス・水害地形分布図』の贖目すべき造本の冴え等々、大学出版部協会の実力を目の当たりにして、私は感動した。そして、このような高度な学術書の出版に対し多額の助成をさせていただいている日本生命財団にあらためて深甚の謝意を表したいと思う（一九九二年度助成は総額三〇〇〇万円）。

ところで刊行助成部会は、その生い立ちの故もあって、「日生助成係」的な性格が強けれども、実はそれだけではない。とくに数年ほど前から、「学術書出版のための全般的な刊行助成の開拓」をスローガンに、視野を拡げながら新しい活動を始めている。その中心が、四年制私立大学三七三校を対象に行なった「学術研究成果刊行助成に関するアンケート」調査の実施とそのまとめ、冊子『私立大学における学術研究成果の刊行助成制度一覽：一九九二年版』の製作である。この活動は、平川俊彦前部会長（法政大）の熱意と並外れた行動力とで実現したのだが、現在はその延長上で、『二覽』の充実（一九九三年版の作成）のために「助成制度のある六九大学」に再度のアンケートを行なってその回収にあたっていているところである。

研究成果としては間違いなく優れているが、出版の採算にのりにくいという企画は、いくらでもある。資金不足で出版できないのであれば、出版助成金を探すべきだ。出版物の質に自信が持てれば、そのために使われる「金」は生きたことになる。「金」を生かして使うことを考える場、それが刊行助成部会、と言えるだろう。

## ミツバチの四季

田口迪太郎

(大学出版部協会顧問)

### 遠来の賓客

庭先でミツバチを飼いはじめて、今年で二三年になるが、そもそものはじまりが、おもしろい。

昭和四四年の暮れに、私は、いまも住んでいる相模原市に土地を求めて、新築した家に引っ越してきたのであるが、これを待ち構えていたかのように、翌年の初夏のころ、二階の北側の高窓の戸袋に一群のミツバチが住み着いた。

何処からやってきたのか。まさか新来の主一家を慕ってはるばる訪ねてきてくれたわけでもあるまいが、身びいきなこじつけをすれば、南西に開けた相模川の川原を越えて大山・丹沢の山並みを一望する、当地の抜群の住み心地を感知してのことかもしれない。ちなみにこの地は、縄文中期の標式となっている「勝坂式土器」の出土地でもあり、縄文人が自然の恵み豊かな生活を営んでいた由緒ある土地柄なのである。

余談はさておき、一年を経て、ミツバチの巢は戸袋いっぱい三層に広がって、雨戸が使えなくなりました。いたしかたなく、玉川大学農学部のミツバチ研究室に依頼して、教材用に撤去してもらったが、このとき飼育箱に収

容して庭先に置いてもらったミツバチの一群が、そもそも彼女たちとの馴れ初めとなった次第である。

### 神秘的ミツバチの世界

さて、季節の化身のように花から花へと飛びまわって、豊穣な蜂蜜をもたらす「乳と蜜の流れる里」といわれるように、古来、楽園のシンボルとしてロマンをかきたててきたミツバチではあるが、誰でもが身近に感じ、親しみをもっているわりには、その実態を知ることはずくなく、神秘のヴェールに包まれている。

通常ミツバチの一群は、一匹の「女王蜂」と数万の「働き蜂」で構成されている。そのほかに、季節によっては数百から数千匹の「雄蜂」がいる。働蜂の体長は一二〜一四ミリ、体重は〇・一グラムと小さい。女王蜂は倍くらい大きく、体長は一五〜二〇ミリ、体重は〇・三グラムくらい。雄蜂はその中間である。(イタリア種の場合)

女王蜂の役目は、群の活動を維持するために、もっぱら卵を産みつけ、消耗激しい蜂を補うことである。そのため晩春から初夏の最盛期には、一日に二〇〇〇個もの卵を産む。群の中で唯一のオスである雄蜂は、新しく生れる処女蜂と交尾して女王蜂に仕立て、自分の遺伝子を残すことに短い生涯をささげる。働蜂はメスではあるが産卵機能はなく、群の一切の生産労働を引きうけている。巢の造営と巢内の清掃、育児とそのため食糧となる花蜜と花粉の採取、外敵からの防衛と危機管理などなど、およそ群を

維持し増殖するためのあらゆる労働が、小さな彼女らの双肩にかかっているのである。

以上のように、それぞれの役割を担った数万の個体が、群の維持と種の増殖という至上目的にむかって協同生活を営んでいる。ミツバチはアリなどと共に「社会性昆虫」とよばれている。つまり、ミツバチの世界では、個々の蜂よりも、それらが統御された「群」としての働きに真の意味があることになるが、それだけに、複雑な全体像をイメージすることは容易ではない。しかも、ミツバチの生活の大部分は、一般には目に触れ難いブラックボックスの中で営まれているし、野外で蜜を集める行動半径は、数キロもの広い範囲に及ぶという。神秘性は高まるばかりである。

#### ミツバチの季節

この拙稿が読者の目を汚す一月ころ、ミツバチは、巣箱の中央で緩く球状に集まっているが、休眠しているわけではない。エネルギーのむだな放散を避けて、来たるべき春の活動にそなえているのであろう。北半球の他の動植物とおなじように、ミツバチにとっても、冬は蓄積の季節、準備の季節である、この時期の成否が春から夏にかけての収穫を決定し、群の消長を左右することを知っている。

花の蜜と花粉をエネルギーとタンパク質の供給源としているミツバチの活動は、当然野外の花の盛衰と波長を同じくしている。春先から初夏にかけての、むせかえるような花の盛りにくらべれば、秋の花はいっぱんに地味である。

九月の半ばには、早咲きの山茶花が咲き始める。一〇月に入ると、色とりどりのコスモスが路傍に咲き乱れる。近年、荒地地にはびこって嫌われもののセイタカアワダチソウも、花の少ないこの時期のミツバチにとっては、冬越しのための貴重な蜜源、花粉源である。

一二月半ばには、木枯らし第一号が枯れ葉を払い落とし、一二月に入ると東京近郊でも強い霜におそわれて山野はいよいよ淋しくなるが、それでも、寒椿、茶の花、ビワの花に早咲きの椿も加わって、わずかながらも蜂を誘っている。一月も下旬の大寒のころには、さすがに蜂が巣を出入りする日は少ないが、ときたまおとずれる小春日和には、ワンワンと羽音が聞こえるほど多くの蜂が巣から飛び出して、花粉団子を脚につけて帰ってくる。

二月に入り立春をすぎると、急に光の量も増えて明るくなる。日当たりの梅もほころび、日溜まりではオオイヌノフグリのような小さな碧色の花が咲いていて、気の早い雲雀も囀りはじめる。春一番の強い南風が梅を満開に誘い、花壇のクロッカスの可憐な花が開くようになると、もう春は本番。ミツバチの活動はにわかに賑やかになってくる。黄、橙、鶯色、灰白色と、脚につけて帰ってくる多彩な花粉団子の色が、訪れる花の種類が豊富になってきたことを告げる。このころ、巣箱のなかでは、緩みはじめた蜂球の中心部で、新しい季節に期待をかけた、力強い女王蜂の産卵がすでに開始されているのである。

(次号へつづく)



## 北海道大学図書刊行会

▼「驚くべきことがぼくに起こった。7と8、どっちが先だったか突然忘れてしまったのだ。123456、その先が思い出せない。：『わたしの考えだと、7のあとに8がくる場合は、7は8のあとにくる』とレジのおぼさん。」(7を資本主義、8を社会主義に入れ替えてみよう) ▼右はハルムスの詩から。ハルム

大学出版部ニュース

## 慶應通信

▼〈新刊〉石川忠雄著『私の夢私の軌跡』(A5判五三〇ページ・四八〇〇円)。

▼昨年六月慶應義塾長を退任した石川忠雄同大学名誉教授が塾長として十六年の長きにわたって在任した間に行なった式辞や講演などの主だったものを集録した著作集が、昨年十二月、「慶應通信」から刊行された。

スというロシアの詩人の名前を知っている人は多くはあるまい。一九〇五年生、三〇年代に活躍。

逮捕。四二年獄死▼定型韻律詩の他は異端とされたロシアの詩の世界にも自由詩の再生現象が始まった▼工藤正広『ロシア・詩的言語の未来を読む』(A5判・五五六二円)が、北海道新聞文学賞受賞。著者は闇にあった詩人たちとその作品を発掘、未来へつなげることで定型韻律詩への鎮魂歌を奏でる。

## 聖学院大学出版会

▼高橋義文『ラインホルド・ニーバーの歴史神学 ニーバー神学の形成背景・諸相・特質の研究』(四六判上製 四八〇頁 定価四四〇〇円)を12月上旬に発売します。▼R・ニーバーの生誕百周年にちなんで催しを昨年当大学総合研究所が行いました。ニューヨークのユニオン神学大学教授として神学のみなら

ず社会活動家、政治哲学者、倫理学者、歴史哲学者、文明批評家としても活動し、20世紀アメリカの政治・外交に大きな影響を与えた人物です。▼20世紀の様々な思想と対決しながら、揺れ動く現実の問題に政治的・倫理的判断を独特な表現で発言を続けたリベラル・リアリスト政治学者の真意と思想の根源が何であったのかを丹念に追求した日本での初めての本格的なニーバー紹介・研究の書です。

## 産能大学出版部

▼「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ」で始まる詩「青春」の作者サムエル・ウルマンの研究著「マーガレット・アームブレスター女史が来日、同時に『サムエル・ウルマンの生涯とその遺産』(M・E・アームブレスター著 作山宗久訳 二〇〇〇円)が発売された。「青春」は昭

和二〇〇年、英字誌にマッカーサーの座右の銘として紹介され戦後の荒廃した世相の中で草の根的に知れ渡った詩である。

▼21世紀に向けて首都圏および各都市では交通網整備による様々な構想が打ち出されている。『全国新線・新駅交通地図』(矢田晶紀著 三八〇〇円)は、一般に入手しがたい極秘情報を地図上に、より詳細に示し、計画に伴う沿線の将来像も見込んだ交通計画の決定版である。

▼本書により、太平洋戦争中の戦災とその後の米軍の施設接収などにより大きな損害を蒙った慶應義塾が急速に復興を遂げ、特に著者が塾長をつとめた十六年間は、理工学部の設置から最近の湘南藤沢の二学部新設、ニューヨーク学院開設に至る、教育内容及び施設設備の両面で大きく飛躍した過程とその成因を、著者自身の言葉により理解することが出来る。特に大学関係の方々におすすみたい好著

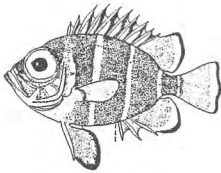
## 玉川大学出版部

▼日本とそれに続くNIEESが著しい経済発展をとげている要因の一つは、西洋モデルの高等教育の受容への取り組み方の違いに求めることができるのではないか。アルトバック他編『アジアの大学』(七二一〇円)はアジアを舞台とした大学のバリエーションを見事に類型化している。ポスト大衆化のアメリカ

大学出版部ニュース

## 東海大学出版会

▼好評を博した『日本産魚類大図鑑』につき、日本産の魚類既知種三六〇〇余を網羅した『日本産魚類検索』が完成した。二万余点の鮮明な全形図に加え分類形質図を並べた、完全な絵解き方式による、使いやすく画期的な検索図鑑である。私たちの周囲に生息する多くの魚の名前が一目でわかる、魚類愛好者



待望の書。中坊徹次編『日本産魚類検索―全種の同定―』特別定価二二七五円(一九九四年一月末日まで)定価二五七五〇円

高等教育の構図を描いた江原武一『現代アメリカの高等教育』(四九四四円)は日本の将来モデルを示唆している。

▼市川昭午編『大学校の研究』(五一五〇円)。中央政府の各省庁と地方公共団体の各部署が所管する大学校などの教育訓練施設に焦点をしばった初めての研究書。

八つの大学校の事例報告、各省庁および部局所管学校の所在地一覧表などの資料を付した。

## 中央大学出版部

▼土方直史著『協同思想の形成―前期オウエンの研究―』(定価三八一一円)

フランス大革命とイギリス産業革命に遭遇し、一九世紀工業社会へと変貌していく移行期に社会改革に献身し、協同組合運動の父」という伝統的評価がなされてきたオウエン、さらに全人類の「協同と一致」を理想とし

## 東京大学出版会

▼東京大学教養学部英語教室編『The Universe of English』が好評を博している。刊行後八カ月で七刷、約四万部という実績は、大学出版部にはふさわしくないのでは、と思えるほどである。

もともと教養学部一年生の統一英語授業の教科書なので、他大学の学生・教師にひろがることは期待していたが、新聞・雑

「新道徳世界」に込められた意図を、彼の自然思想、宗教思想の解明を通してその実像に迫る。

▼小島武司・韓相範編『韓国法の現在(下)』(定価五一五〇円)

日本と韓国の法制は歴史的にみてほぼ共通であるが子細に検討すると法令の随所に微妙な違いがあり社会の構造や政策に根ざす異質性に気付く。本書は法史・民事・刑事等の諸分野を包含し、問題の背景を大局的に論じた後、核心的問題を追究する。

誌で好意的にとりあげられたことで、一般書店でもベストテン入りする事態となった。駒場の英語教官が選りすぐった「自分で読んでみて面白いと思った」、自分が学生の時に読んでおきたかった」文章を、読者が高く評価してくれたことに感謝したい。本年三月には二年生用の教科書『The Planet of English(仮題)』を刊行の予定。さらに読みごたえのある文章をそろえ、前者に勝るとも劣らぬ内容となった。

## 東京電機大学出版局

▼システム分析では、現代の複雑な社会の内部にある大規模な情報を、的確に捉え、理解する必要がある。ソフトウエアが複雑さを増し、規模を拡大していくにつれて、システム分析の仕事は益々困難になってきている。旧来の体制や秩序が成熟し、飽和点に達したときパラダイムシフトが起こるように、ソフト

大学出版部 ニュース

## 法政大学出版局

田辺悟著／もとの人間の文化史  
▼『海女(あま)』二八八四頁  
：古今の文献の渉猟は当然ながら、さらに大きな特徴は、著者が三十余年間こつこつと行ったフィールドワークと、それによって収集・蓄積された独自の調査資料と見聞の記録が、全編にわたって駆使されていることである。：道具類の、種類と



歴史についての資料と記述の豊富さは、決して類書が少なくないこの分野でも、抜群である。：海女の暮らしと伝承を述べた章も、なかなか面白い。(あ)  
『週刊読売』93・10・抄録

ウェアの世界においても変革が起こっている。それが「オブジェクト指向」である。

データの流れや手続きを考慮のでなく、まず目的を念頭におくこの手法は、プログラム開発に始まり、より広大な世界を対象に一般化しつつある。最先端ともいえるシステム分析を対象に解説した本を刊行する。

『オブジェクト指向システム分析』D・W・エンブレイ他著、山正行監訳、定価三九一四円)

## 東京農業大学出版会

▼『東京農業大学醸造学科と酒づくりのはなし』竹田 正久著  
著者は、農大農学部醸造学科長で、醸造微生物学研究室の主任教授である。著者はそのまきが『四季に関係なく熱燗、ブランドや酒の種類(純米、本醸造など)を気にしない。また普通酒や糖類添加酒がまずいとは思わない。むしろ特徴と変化

## 放送大学教育振興会

▼一九九四年三月に刊行予定の七十三点の新作は力作ぞろい。  
▼『心理学史』は、大山 正(日本大学教授)ら五名の執筆陣が、現在の心理学の歴史的背景をたどりながら、心理学の重要問題を考察。心理学の適切な理解を歴史的な展望から得ることを重視する。▼人間が誕生から死に至る過程で展開していく代表的

があつて楽しい。酒は楽しい雰囲気、おいしくなる。私の晩酌哲学である」と語っている。  
『醸造学科』は、数多い大学の中で、農大にしかない、ユニークな学科である。その農大の醸造学科の果している役割、又研究室で開発・商品化しているいろんな酒の紹介。そして又酒造技術の進歩は、これまでの『名水・好適米』に関係なく、一般の河川水、普通米でも、質の良いうまい酒がつけられるという。

な行動様相を取り上げ、日常の具体的環境に適応を図りつつ生活する人間を多視点からとらえて理解する『人間行動学』は、中島義明(大阪大学教授)ら八名の執筆による。▼『経済文明論』は、経済社会がいかに形成され衰退していくのか。今日の産業社会のなかで成立してきている経済制度を取り上げ、その発展の可能性と限界を検討する。▼『書誌学・古文書学』は「文字と表記の歴史入門」としてユニーク。

## 明星大学出版部

▼井出洋一郎著 『美術館学入門』（四六判 三六〇五円）

現代社会が美術館に対していかなる要求をもっているか。美術館が着実健全な運営を進め、第三者からの評価を大事にしていれば、それを囲む社会もおおざと軽んじられない雰囲気ができとくる。美術館は放っておくと象牙の塔と化する体質をもつ

大学出版部ニュース

## 名古屋大学出版会

▼近藤孝弘著 『ドイツ現代史と国際教科書改善—ポスト国民国家の歴史意識』（定価八二四〇円） 第一次大戦以降のヨーロッパにおける歴史教科書改訂作業の丹念な検証を通じて、ドイツが如何にして自国中心的歴史観を克服してきたかを明らかにする。わが国教科書問題の再考を促す労作。

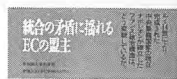
ており、よそからの批判を受けつけたがらない。そのためには、これから学芸員の資格を取ろうとする若い人たちの見識と、一般市民の覚めた目と問題意識があれば改革を訴えかけられる：と著者は述べている。本書は、学芸員の社会的責任の重さを踏まえながら、必要な法律等を網羅した、美術館学芸員をめざす人のための入門書。▼戦後教育史研究センター第二弾は、山本礼子著『占領下における教職追放』

▼望田幸男他編 『西洋近現代史研究入門』（定価二八八四円） 研究への視角、主要問題群、代表的文献を案内した、卒論を作成する学生と関連領域の研究者のためのベーシックな研究入門。

▼西條八東・坂本充編 『メソコスム 湖沼生態系の解析』（定価六六九五円） 近年急速に発達しつつある、水域をシートで仕切った隔離水界を用いる方法により、生物相互作用を追跡した諏訪湖での実験成果。

## 早稲田大学出版部

▼「叢書ワセダ・リブリ・ムンデイ」のフランス編全3巻、『フランスの政治』『フランスの経済』『フランスの社会』（定価各二



五〇〇円）が完結した。EC統合で揺れるフランスの最新の動向を伝える。呈内容案内。

▼「新しい中国文学」（全6巻）の既刊「楯を蓋いて」「都市の困惑」（定価各二四〇〇円）が、「朝日新聞」「毎日新聞」「すばる」をはじめとする各紙誌の書評に取り上げられ、好評を博している。

▼「昨年12月に刊行された姜克実『石橋湛山の思想的探究』（定価九八〇〇円）が第14回「石橋湛山賞」を受賞した。

## 京都大学学術出版会

『近世小説・営為と様式に関する私見』濱田啓介著、定価五五〇〇円。

▼二〇世紀が終わらんとしている。今世紀を読み解く大きな鍵になりうる、一九三〇年代のアメリカにおける「ニューディール政治秩序」の形成過程を、歴大な第一次資料をもとに詳細に検討した書き下ろし論考。

『ニューディール政治秩序の形成過程の研究』紀平英作者、定価五六〇〇円。

▼ハードカバーから文庫本までいまや「小説」は巷にあふれかえっているが、いったいその草創期はいかなる状態だったのだろうか。日本において、出版を目的とした文芸作品の創作が始まった江戸時代に遡り、作者、出版者、そして読者の三者三様の生態や相互関係のなかに、小説の揺籃期の姿をあぶりだす。

## 大阪経済法科大学出版部

▼アレクサンダー・S・マーチン、ヘレン・グラハム編山口正之監訳向井喜典・岩村等ほか訳『フランスとスペインの人民戦線―全体像比較研究―』。

一九三〇年代のフランスとスペインの人民戦線運動がもつ歴史的意義を記念して、欧米諸国の現代史家が86年4月にイギリスのサウサンプトン大学で開いた国際会議の報告論文集である。

## 大学出版部ニュース

### 九州大学出版会

▼鳥巢京一著『西海捕鯨業史の研究』定価九四七六円。江戸期の鯨組経営の実体や明治期の捕鯨会社の経営形態等について、第一次資料を駆使した経済史・経営史的研究。わが国の捕鯨業史研究の空白部分を埋める大著。日本生命財団助成図書。▼小林哲也・江淵一公編『多文化教育の比較研究―教育における文化

過去50年来の研究史をふまえて、豊富な原史料を活かした多面的な実証的研究の成果を集成しており、欧米諸国での人民戦線史研究の到達点である。「日本語版への序文」で編者は、一九三〇年代に人民戦線運動がなくなった役割を歴史実証的に再検討する課題がもつ今日の意義を強調している。従来のが国で知られなかった新しいいくつかの事実も散見される。大阪経済法科大学人民戦線研究会による海外文献訳書の一つである。

的同化と多様化』定価五六六五円。異民族・異文化の共生をめざす教育という課題に取り組んだ先駆的研究。八五年文部省の助成を得て初版を発行。長く品切状態であったものの新装復刊。▼山下功編『障害児の心理と指導』定価三九一四円。障害児教育の足跡をたどり、その中で解明された教育心理学的理論や指導方法についてまとめたもの。初版を九一年日本生命財団の助成を得て発行の新装普及版。

### 三省堂での記念ブックフェア



## 関西大学出版部

▼渡辺幸博著『哲学の現在―サルトルからポスト構造主義へ』(定価一五〇〇円) 無意識的なものに立脚して伝統的形而上学を根底から批判するポスト構造主義は、20世紀末現在の精神状況を極めてよく写し出している。本書は現象学、実存の思想、構造主義などとの関連をあとづけることにより、その実態に照明

を当て、同時にその今日的意味を解明する。▼山川雄巳著『政策とリーダーシップ』(定価九六〇〇円) 本書は政策科学とリーダーシップ研究の実証的統合を試みた注目作である。

第一部 理論的考察―政策研究の課題と方法、リーダーシップと政策ほか、全9章

第二部 日本の政策過程―首相リーダーシップの動態、市会議員と政策過程、中間管理者のリーダーシップほか、全12章

▽協会創立30周年記念ブックフェアを全国で展開

「大学出版部協会」が本年創立三十周年を迎え、各地の大型書店や大学生協書籍事業部などの店舗ですでに開催され、売れ行きも順調。大学生協の各地区(東京地連、東海地連、京都地連、九州地連など)で、二十五周年と同様に巡回フェア(三十周年記念目録使用のカタログフェアも併用)も本格化している。

# 新刊案内 '93・10 / '93・12

(表示価格は税込みです)

## ■北海道大学図書刊行会 私たちのくらしと動物たち

北海道大学放送教育委員会編 一八五四円  
高齡社会をむかえる北海道 二〇六〇円

北海道大学放送教育委員会編 二〇六〇円  
総合エネルギー論入門―ヒトはどこまで生き永らえるか

大野 陽朗 一三三九円  
カントと自由の問題 新田 孝彦 六一八〇円

■聖学院大学出版会  
ラインホールド・ニーバーの歴史神学 高橋 義文 四四〇〇円

■慶應通信  
新版 学習障害―その早期発見と取り組み― 川村 秀忠編著 二二〇〇円

動作法ハンドブック―初心者のための技法入門― 大野 清志/村田 茂編 二三〇〇円

信と知―日本倫理学会論集28― 日本倫理学会編 四〇〇〇円  
私の夢 私の軌跡 石川 忠雄 四八〇〇円

正論自由 第十巻 中村 勝範 一八〇〇円

多国籍企業税法―慶應義塾大学法学研究会叢書55― 木村 弘之亮 七五一九円

病弱教育における養護・訓練の手引 文部省 八七〇円

## ■産能大学出版部

トヨタシステムの研究

日立・戦略広告に21世紀を読む

サムエル・ウルマンの生涯とその遺産

影山 信一 三二〇〇円  
山田 理英 一九〇〇円

M・E・アームプレスター/作山久久記

矢田 晶紀 三八〇〇円

新しいOAの考え方と活用法 白旗修・斉藤勇二 三〇〇〇円

OJTと職場活性化の実践技法 岡部 博 二〇〇〇円

いま、知恵を出してぐんぐん伸びている会社の研究

会社は人生の修養道場だ！ 上妻 英夫 一五〇〇円

顧客に好かれる 越智 宏倫 一五〇〇円

引き算哲学の時代 中井 久史 一五〇〇円

売れるシステムづくり 飛岡 健 一五〇〇円

先が見える感性の磨き方 荒川 圭基 一八〇〇円

雇用摩擦 ロッシェル・カップ/上野俊一訳 国司 義彦 一五〇〇円

二〇〇〇円

■玉川大学出版部  
玉川大学の研究 市川昭午編 五一五〇円

『日本教育史資料』の研究2―藩校編― 日本教育史資料研究会編 一二三六〇円

ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義 山崎 高哉 一四〇〇〇円

英語の言語感覚―ルイちゃんの英文法― 岩垣 守彦 五一五〇円

七五一九円

八七〇円

クラフト・デザイン・テクノロジー

J・ペンフォールド／織田芳人訳 三九一四円  
大学評価―理論的考察と事例― 新堀通也編 九二七〇円

■中央大学出版部

韓国の現在(下)

小島武司／韓相範編 五一五〇円

Mark Twain のミズーリ方言の研究

後藤 弘樹 四二二〇円

フランス金融史研究

中川 洋一郎 三九一四円

現代ロシアの文学と社会

大木 昭男 三六〇五円

―停滞の時代―からソ連崩壊前後まで

■東海大学出版会

日本産魚類検索―全種の同定―

中坊徹次編 特価二三一七五円

沿岸の海洋物理学

宇野木早苗 一四四二〇円

環境地質学からみた地球環境の諸問題

日本地質学会環境地質研究会編 二八八四円

マドレーヌはどこにある―ブルーストの書法と幻想―

セルジュ・ドゥブロフスキー／綾部正伯訳 三二九六円

20世紀の音楽―ブレントニスホール音楽史シリーズ⑥―

E・ソーズマン／松前紀男・秋岡 陽訳 五六六五円

訓読説文解字注 宛冊

尾崎雄二郎編 三二九六〇円

医学小知識

東海大学医学部編 一八五四円

エッダ詩 巫女の予言

菅原邦城訳 五六六五円

図説イギリスの歴史

大沢謙一訳 二八八四円

Structure, Formation and Evolution of Fossil Hard Tissues  
I. Kobayashi, H. Matvei, A. Sahni 編 三九一四円

■東京大学出版会

性差と文化(東京大学公開講座57)有馬朗人著者代表 二二六六円

東京大学年報 第四卷 東京大学史料研究会編 二〇六〇〇円

からだの自然誌

坂井 建雄 二二六六円

白亜紀の自然史

小島 郁生 二四七二円

法の近代とポストモダン

海老原明夫編 七四一六円

国際関係学

百瀬 宏 二四七二円

マス・コミュニケーション受容理論の展開

児島 和人 四六三五円

変貌するアジアの農業と農民

金沢 夏樹 五五六二円

サイレント・アースクエイク―地球内部からのメッセージ―

川崎一朝・島村英紀・浅田 敏 二八八四円

機械設計―基本原理からマイクロマシンまで―

〈東京大学機械工学3〉 中島 尚正 三〇九〇円

秘密院会議議事録61・昭和篇19 国立公文書館所蔵 一四四二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇43 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇49・50 国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

アジアから考える2―地域システム―

溝口・浜下・平石・宮嶋編 三〇九〇円

教育行政学

平原 春好 二八八四円

授業料の解像力―教育における〈近代〉の分析―

田原 宏人 四九四四円

近世の郷村自治と行政

水本 邦彦 五三五六円

デモクラシーの未来―アジアとヨーロッパ―

加藤 節 二六七八円

企業者活動と企業システム―大企業体制の日英比較史―

大河内曉男・武田晴人編 四九四四円

恐竜学

河川生態環境工学—魚類生態と河川計画—

小島 郁生編 四六三・五円

玉井信行・水野信彦・中村俊六編 三九一・四円

Theoretical and Applied Mechanics, Vol. 42

堀 素夫編 二〇六・〇〇円

枢密院会議事録62・昭和篇20

国立公文書館所蔵 一四四二・〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇44

国立国会図書館所蔵 一二三六・〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇51・52

国立国会図書館所蔵 一六四八・〇〇円

ドイツ農村工業史—プロト工業化・地域・世界市場—

馬場 哲 五九七・四円

少年司法政策の社会学—アメリカ少年保護変遷史—

徳岡 秀雄 五三五・六円

近世房総地域史研究

吉田伸之・渡辺尚志編 七〇〇・四円

沖繩返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈—

河野 康子 六一八・〇円

ペレストロイカと改革・開放—中ソ比較分析—

近藤邦康・和田春樹編 五五六・二円

両大戦間の日米関係—海軍と政策決定過程—

麻田 貞雄 七八二・八円

エネルギー—アリストテレス哲学の創造—

桑子 敏雄 六五九・二円

免疫学入門—ABCから中心テーマへ—

狩野 恭一 一六四・八円

数値流体力学

荒川 忠一 三九一・四円

日本らしい史

山本 俊一 八七五・五円

MR E イヌ・ネコ断層アトラス 館野之男・山田一孝 七八二・八円

Submarine Cave Bivalvia from the Ryukyu Islands—

Systematics and Evolutionary Significance

〈Bulletin No. 35〉

速水 格・加瀬友喜 一七五一・〇円

枢密院会議事録63・昭和篇21

国立公文書館所蔵 一四四二・〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇45

国立国会図書館所蔵 一二三六・〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇53・54

国立国会図書館所蔵 一六四八・〇〇円

■東京電機大学出版社

第1種情報処理試験全問題解答集〔'94年版〕

文科系のための教科書BASIC 小山内幸治 二二六・六円

ウォルシュ解析〈数理科学セミナー〉 遠藤 靖 二九八・七円

オブジェクト指向システム分析〈情報科学セミナー〉 三三九・九円

D・W・エンブレイ他著 島山正行監訳 三九一・四円

工担者受験教室

アナログ・デジタル電気通信技術の基礎 岩崎 臣男 二一六・三元

工担者受験教室

デジタル第1種端末設備接続技術 大久保弘六 二二六・六円

電気・電子・情報系の基礎数学Ⅱ 安藤・土肥・大沢 二九八・七円

■東京農業大学出版社

東京農業大学醸造学科と酒づくりのはなし 竹田正久 一〇〇〇・〇円

■東京理科大学出版社

法政大学出版局

理論を讀ませて H・I・G・ガダマー／本間・須田訳 二〇六・〇円

昔日の巨匠たち—ベルギーとオランダの絵画—

E・フロマンタン／鈴木祥史訳 三五〇・二円



歴史の島々

結社の時代―19世紀アメリカの秘密儀礼―

M・サーリンズ／山本真鳥訳 二九八七円

諸国民の時に

空間の文化史―時間と空間の文化／下巻―

E・レヴィナス／合田正人訳 三九一四円

母よ嘆くなかれ〔新訳版〕

S・カーン／浅野敏夫・久郷丈夫訳 三六〇五円

続・蜂の寓話

パール・バック／伊藤隆二訳 一四四二円

やまがた伝説考

B・マンデヴィル／泉谷治訳 四九四四円

われわれのあいだで

E・レヴィナス／合田・谷口訳 一九五七円

カンザス・シティ・ジャズ―ビバップの由来―

鳥兎沼宏之 三八一円

蠅の苦しみ―断想―

R・ラッセル／湯川新訳 四八四一円

ヨーロッパ人とアメリカ人

E・カネッティ／青木隆嘉訳 二〇六〇円

台所の文化史

S・ミラー／池田栄一訳 三五〇二円

眼の中の死―古代ギリシアにおける他者の像―

M・ハリスン／小林祐子訳 二九八七円

旅の思想史―ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ―

J・P・ヴェルナン／及川馥・吉岡正敏訳 一五四五円

病のうちなる治療薬

E・リード／伊藤誓訳 三九一四円

祖國地球

J・スタロパンスキー／小池健男・川那部保明訳 三六〇五円

ディルタイ―精神科学の哲学者―

E・モラン／菊地昌実訳 二二六九円

マルクス価値論概説

R・L・マックリール／大野篤一郎・他訳 五九七四円

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・ソフト）  
講&Q 紛争と手続き  
―民事裁判とその周辺―

井上 治典 二五八〇円

教師教育ビデオ教材―印刷教材10冊を含み定価各二〇〇〇〇円―

○「情報基礎」入門―これがパソコンだ―（22分）

○「情報基礎」入門―学習指導要領と実践例―（23分）

■明星大学出版部

美術館学入門

戦後教育改革通史

美術館学入門 井出洋一郎 三六〇五円

戦後教育史研究センター編

朝河貫一の世界

美と実在―フランスの叡智―

歩く文化 座る文化

科学哲学 26特集・科学的説明

平和研究第18号 特集・冷戦後の平和研究

水野祐著作集 全10巻

第4巻 非情の世紀 上―千甲の乱外史―

早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇第三期 全16巻

第34巻 中世歌書集 三

井上宗雄編 一八〇〇〇円

■名古屋大学出版会

ヴェーバーとナチズムの間―近代ドイツの法・国家・宗教―

ドイツ現代史と国際教科書改善―ポスト国民国家の歴史意識―

佐野 誠 五六六五円

近藤 孝弘 八二四〇円

朝河貫一研究会編 三〇〇〇円

掛下栄一郎 四五〇〇円

野中 涼 八〇〇〇円

日本科学哲学会編 二〇〇〇円

日本平和学会編 二八〇〇円

四五〇〇円

西洋近現代史研究入門

望田幸男他編 二八八四円

メソコスム

湖沼生態系の解析 西條八束・坂本充編 六六九五円

日本古代奴婢の研究

神野 清一 七二一〇円

よくわかる股関節の病氣―手術をすすめられたひとのために―

岩田 久監修／長谷川幸治著 二〇六〇円

心理学はしがき集  
砂漠植物の生理・生態  
M・クルーゲ、I・P・ティン／野瀬昭博訳

村上 芳夫 五九七四円  
成瀬 悟策 二八八四円  
鳥巢 京一 九四七六円

■京都大学学術出版会

ニューディール政治秩序の形成過程の研究―20世紀

アメリカ合衆国政治社会史研究序説― 紀平 英作 五六〇〇円

近世小説・営為と様式に関する私見 濱田 啓介 五五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

■関西大学出版部

資本主義発展の政治経済学―接合理論からレギュラシオン理論へ―

若森 章孝 七四〇〇円

政策とリーダーシップ

山川 雄巳 九六〇〇円

哲学の現在―サルトルからポスト構造主義へ―

渡辺 幸博 一五〇〇円

■九州大学出版会

明治期紡績労働関係史―日本の雇用・労使関係形成への接近―

岡本 幸雄 三六〇五円

障害児の心理と指導〔新装版〕

山下 功編 三九一四円

多文化教育の比較研究―教育における文化的同化

と多様化〔新装版〕 小林哲也・江淵一公編 五六六五円

HAGAKURE―Spirit of Bushido (英文・和文合本)

葉隠―東西文化の視点から 葉隠研究会編 五〇〇〇円

アメリカにおける広域行政と政府間関係 (北九州大学法政叢書12)

▼空白恐怖症というものがあるらしい。E氏もその一人。ある団体の創立30周年記念誌に原稿を依頼したところ、空白を予定していた部分にまで、びっしり文字を埋めてきた。私としては何とも不本意ではあったが、泣く子と先輩には勝てぬとあきらめた。著者の中にも、白頁があると校正の際にその分を書き足してこられる方がいる。しかも目いっぱい……。

▼空白恐怖症患者の論理は明快である。すなわち「空白が多い↓頁数がふえる↓定価が高くなる↓読者に迷惑―売れない」ということ。正論と言うほかはない。ただし、空白に価値を認めなければ、の話だ。空白に価値を認めるとすれば、空白を作り出すために、冗長な文章や無駄な繰り返しを削除することのほうが重要になるだろう（E氏の文章が冗長だと言っているのではない。くれぐれも念のため）。▼ステイヴン・カーン「空間の文化史」（浅野敏夫・他訳／法政大学出版局）によれば、十九世紀の末期から第一次大戦に

かけて、空間の概念は音をたてて変わっていったという。絵画ではキュビズムが生まれ、対象と、背後の空間の区別がなくなる。アーキペニコの彫刻では、女性の顔を空間によって表現している。自己主張を持った空間の登場、図と地の逆転――。文学では象徴派の詩人が、意識的に空白に形を与える「自由詩」の実験を始める。マラルメは、

●製作の現場から  
7  
白いページは  
好きですか

校正刷りの余白に、スペースの取り方の、改頁の位置の、活字の種類、指示をこと細かに書き込んでいたという。

▼もちろん、詩集と一般の書物とりわけ学術書とを一緒にはできない。雑誌では創刊当初の工書店の書評誌のように、これはキュビズムかと思わせるようなレイアウトがあったが、それが悪評さくさくだったのは皆さん

ご承知の通りである。書物における空白、それはカーンの言葉を借りれば「伝統的空間」に属するだろう。

▼とはいっても、それは「役に立たない空間」ということではない。文字や図版を際立たせるための空間（行間や版面外の余白）であり、読者を書物の世界にいざなう空間（見出しの行どり）であり、読者にひと息つかせるための、あるいは考えさせるための空間（改丁や改頁ごとの空白）である。カーンは、空間革命（こんな言葉は使っていないが）後の空間を Positive negative space＝積極的消極空間と名づけている。だとすれば

伝統的空間は消極的消極空間ということになるのだろうが、その消極性によって対象を際立たせ、効果を高めるという意味では、伝統的空間もまた、積極性を持つといえるだろう。

▼話がややこしくなってきた。自分でも理解しきれていないことを書くところが出る。この辺でやめておこう。いずれにせよ、割付レイアウトという仕事は、

空間の処理に尽きるといってもよい。したがってその作業においては、常に空間の効果を考えながら進める必要がある。学術書・専門書の場合、突拍子もないレイアウトはまず出来ないが、突拍子もないことも考えてみる必要がある。考えた末のあたりまえのレイアウトと、何も考えずに機械的に処理したあたりまえのレイアウトとは、同じあたりまえであっても、どこかが違うと信じたい。白いページに編集者の主張がこめられた本――夢のまた夢とは思うものの、一冊ぐらいいは作ってみたい。

（ピーマン）

▼前号でご紹介した小尾俊人氏の「本ができるまで」は、その第17回まで連載が進んでいます。第15回はW・モリスを引用し、用紙、活字の形、タイプ、さらに拙稿とも関連する文字・語・行の間隔、版面の位置についても触れられています。またこの回に限らず、本づくりの書誌学としても貴重な文献が多数紹介されています。ご一読を。

# 大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第20号) '94冬 平成6年1月10日発行 発行所 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954  
頒布価格100円 千共